

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 31 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	水越 楓

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市 日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 14 日 ~ 平成 26 年 7 月 17 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター 京都大学霊長類研究所
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習は、動物園として唯一博物館登録されている日本モンキーセンターにおいて、動物園・博物館について学んだ。
概要
初日は伊谷園長から、JMC と日本霊長類学の歴史を聞いた。その後東山動物園で開催されるワークショップへ参加するため、早めに終了した。
二日目の午前は、動物園での学芸員としての仕事や標本について、野生動物研究を動物園で伝えること、動物園での動物福祉とエンリッチメントについての講義をキュレーターの方々にしていただいた。午後の全体ミーティングに参加し、夕方から採食エンリッチメントの道具を竹や消防ホースで制作した。
三日目は朝、ゴリラのエサ設置、マンドリルの屋内放飼場の掃除を行った。昼ごろヤクニホンザルの解剖を見学し、午後から標本実習を行った。処理を終えた骨格標本を部位ごとに袋に入れ箱に詰めた。液浸標本のホルマリン替えや、瓶での保存はかさばるためビニールにパック詰めする作業を行った。夕方からは、昨日制作したエンリッチメントの道具をアジア館に設置した。
四日目は朝、赤見さんから児童に対する教育方法についての講義をしていただいた。その後実際に高野さんが中学校で骨や進化に関する授業を行っているところを見学した。午後はお客さんに動物園が伝えたいことが伝わっているかどうかを知るために行う調査方法について学び、実践した。
実習内容・感想
・ 標本実習
組み立てられた骨格標本にはなじみがあるが、その元となる骨に触れたのは初めての経験であった。サルの骨はヒトと似ているため、大体の骨がどの部位か判別することができた。標本庫はほぼ埋まっており、スペースの確保が問題となっていた。なので、液浸標本は扱いが瓶より不便ではあるがスペースを取らないビニールパックでの保存方法に移行しているという。捨てることができない標本を保持管理していくことは大きな問題であるように思われた。
・ 環境エンリッチメントについて
竹を餌の入れ物にし、その上から竹で蓋がされる仕組みの道具を作った。片手で蓋を上げなければ餌が食べられないようになっている。(写真1)
私はアカゲザルにエンリッチメントを行ったが、苦戦するものの10分程度で食べ終わった。また、一頭のみが独占して使用していたことも印象的であった。他のメンバーが試した種では、すでに仕組みを知っておりすぐに食べる種や、すぐに道具を破壊した種、仕組みが分からず食べられなかった種と、四者四様であった。同じものを与えるのでは駄目で、種によって強度や難易度などを考えねばならないことがよくわかった。飼育員さんたちが空いた時間に制作することを考えると、安価で簡単に作れ、効果が高いものを、ということになるが、その効果や評価を行うには片手間に行わなければならない飼育員さんでは難しいものがあると感じられた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

・中学校見学

中学二年生を対象に、ヒトとチンパンジーの骨を比べて違いを見つけ、そこから進化や適応について考えるという授業であった。この授業の後、夏休みに JMC での実習を行うということで、今回の授業はその事前学習であった。短い授業時間内に学校の学習要領と自分たちが伝えたいことを含めて授業を組むのは難しく、また、中学生がどこまで専門用語が通じるか、言葉を選びながら説明は事前準備や慣れが必要であるように感じた。これから一般の人に説明することもしばしばあると思うが、どうしたら上手く伝わるか考えていかねばならないと感じた。

・園内実習

お客さんが動物に対してどういう反応をしているか、展示パネルを読んでいるか、どういう会話を行っているかなどを調査した。相手にばれないように調査するのは困難で、短時間しか行うことができなかった。今まで、展示を読んでもらったり、動物について知ってもらったりすることが大切と考えていたのだが、来てくれたお客さん同士のコミュニケーションを豊かにすることも同じように大切であるということはとても新鮮であった。動物を知ってもらう・家族だったり恋人だったりの会話を豊かにするという目的を込めた展示パネルを作る必要があると学んだ。しかしまずパネルを読んでもらうことが難しく、どうしたら読んでもらえるようになるのか、ということが一番大きな課題のように思われた。



写真 1 蓋をあけて餌を取ろうとするアカゲザル

6. その他 (特記事項など)

日本モンキーセンターのキュレーターの高野さん、赤見さん、大橋さん、新宅さん、綿貫さん、獣医師の木村さん、飼育担当の皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。